

「ちばエコ農産物」栽培のために！

(品目別栽培カード③)



すいか・トンネル栽培

千葉県農林水産部

1 認証基準

すいか・トンネル栽培の認証基準は、化学合成農薬の使用成分回数が13回以下、化学肥料使用量(窒素成分量)が12.5kg/10a以下です。

また、堆肥の施用は、1,500kg/10aが目安量とされています。(表1)

認証を受けたすいか ▶

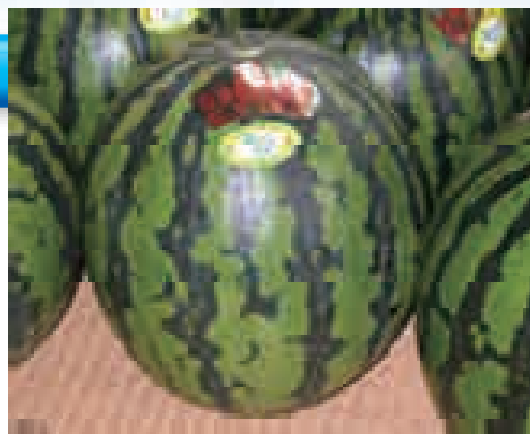


表1 ちばエコ農産物認証基準における農薬の上限回数と窒素成分の上限量(すいか・トンネル栽培)

(平成17年3月現在)

作 型	上 限 量		堆肥施用の目安量(kg/10a)	収穫期
	化学合成農薬(使用成分×回数)	化学肥料使用量(窒素成分kg/10a)		
トンネル栽培	13	12.5	1,500	6~7月

2 認証基準達成のポイントと考え方

1 病虫害防除

ちばエコ農産物の認証基準に適合した薬剤防除例を表2に示します。認証基準となる化学合成農薬使用回数で防除を行うためには、問題となる苗立枯病、つる枯病、うどんこ病、ハダニ、アブラムシなどの病虫害の特徴の理解とそれぞれの発生状況をよく観察し、適期防除を行うことが重要です。加えて、病虫害の発生しにくい環境を作るなど、耕種的防除を行う必要があります。

A. 育苗期 ～集約的な完全防除～

●育苗床は、周辺も含めて清潔にします。

ハダニ類が寄生しやすい茶樹や雑草などは除去し、鉢植えや花苗などはほかの場所に移します。

●苗立枯病対策として、は種後2～3葉期にオーソサイド水和剤80の800倍液を全面散布(2ℓ/m²)します。

育苗床の床土は培養土並びに保水性・排水性の両面を兼ね備えた培養土を使用しましょう。軟弱な胚軸は病原性の低い菌でも発病しやすく、新しい培養土であっても、まったく発生しないとは限りません。苗立枯病はすいかにとって致命的な病気なので、薬剤での防除が必要です。

●育苗床では、集約的な徹底防除を行う。

ロディー乳剤、ダコニール1000などで病害虫を完全に抑制しておきます。

B. 定植から整枝作業期 ～観察による病害虫発生の把握と無駄な農薬散布の回避～

●整枝作業などの機会に葉裏をよく観察します。

トンネルの換気、整枝作業が始まると、アブラムシ、ハダニに注意が必要です。病害虫の特性と発生に合わせて、対象病害虫に適した農薬だけを使用し、無駄な農薬使用を避けます。

●殺虫剤は、観察に基づき、発生に応じた散布を心がけます。

害虫の初期発生を観察してから対症療法的に農薬散布するという手法を取れば、無駄な使用を防ぐことができます。ただし、葉裏までしっかりと薬剤が行き渡るように、丁寧に散布することが前提となります。

●殺菌剤は予防的な散布を心がけます。

病害は、低密度でも発生していると、天候次第では致命的な被害をもたらすことがあります。殺菌剤は、予防的に定期散布します。

●「化学合成農薬に含めない農薬」を活用します。

ちばエコ農業における「化学合成農薬に含めない農薬」であるイオウフロアブルはうどんこ病への予防的効果、コロマイト乳剤はハダニ類の殺虫効果があります。すいかでは、1作当たりイオウフロアブル3回まで、コロマイト乳剤2回までの使用が可能です。

表2 すいか・トンネル栽培のちばエコ農産物認証基準に適合した農薬防除例

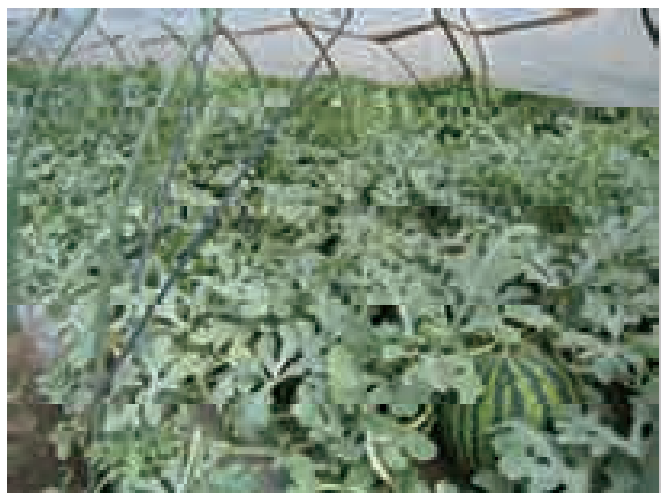
月	旬	主要作業	農薬名	希釈倍数	対象病害虫	備考
1月	下旬	は種				
2月	上旬		オーソサイド水和剤80 D-D92	800倍 処理量20 ℓ/10a	苗立枯病 ネコブセンチュウ	
	中旬					
	下旬					
3月	上旬		ダコニール1000	700倍	つる枯病	
	中旬	定植	ロディー乳剤	1,000倍	アブラムシ類、ハダニ類	
	下旬					
4月	上旬		ベルコート水和剤	1,000倍	うどんこ病、つる枯病	
	中旬		モスピラン水溶剤	2,000倍	アブラムシ類	
			バロックフロアブル	2,000倍	ハダニ類	
	下旬	交配	ベルコート水和剤	1,000倍	うどんこ病、つる枯病	
5月	上旬					
	中旬	摘果	アドマイヤー水和剤	2,000倍	アブラムシ類	発生に応じて
			ベルコート水和剤	1,000倍	うどんこ病、つる枯病	
	下旬		マイトコーネフロアブル	1,000倍	ハダニ類	発生に応じて
		スミレックス水和剤 ※イオウフロアブル	1,000倍 500倍	つる枯病 うどんこ病		
6月	上旬		※コロマイト乳剤 ※イオウフロアブル	1,000倍 500倍	ハダニ類 うどんこ病	発生に応じて
	中旬		モスピラン水溶剤 ※イオウフロアブル	2,000倍 500倍	アブラムシ類 うどんこ病	発生に応じて
		下旬	収穫			
カウント農薬数			13			

※印は、「化学合成農薬に含めない農薬」

C. 交配開始から幼果肥大期 ～ミツバチ放飼直前の徹底防除～

●ミツバチ放飼の直前には、問題となる病害虫を徹底防除しておきます。

交配から幼果肥大期は、ミツバチの放花活動や果実外観に影響するため、農薬散布ができないので、病害虫発生が最も危惧される時期です。病害虫を低密度でも残さないように、放飼直前にモスピラン水溶剤、バロックフロアブル、ベルコート水和剤などで徹底防除を行います。



ちばエコすいかの生育 ▶

D. 果実肥大期から収穫期 ～収穫物への影響を考慮した防除～

●摘果、玉返しの機会に葉裏を観察し、発生病害虫に応じて、使用する農薬を決めます。

●果実に影響があるかどうかを考慮して防除を行います。

出荷が近づいてくるため、発生初期の病害虫は、果実への被害を予想しながら、農薬を使用するかしないかを判断します。

●農薬の使用に当っては、各剤の収穫前使用可能日数を考慮します。

例えば、スミレックス水和剤やスミブレンド水和剤は、収穫21日前までの登録です。

2 施肥

ちばエコ農産物の認証基準に適合した堆肥及び肥料の施用例を表3に示します。

すいか栽培では、現地事例でも有機質肥料主体の施肥が多く、認証基準を達成することは難しいことではありません。ただし、登録名称中に「有機」等が含まれている肥料でも、化学合成由来の窒素を一部に含んでいることがあるので、JAまたは肥料販売業者に問い合わせ、肥料袋裏面にある生産業者保証票を確認し、有機質由来と化学合成由来の窒素の割合を把握しておく必要があります。

なお、本施肥例は主要農作物等施肥基準（平成16年、千葉県）に準じて作成しましたが、各ほ場ごとに土壌診断に基づいて施肥量を決める必要があります。

表3 すいか・トンネル栽培のちばエコ農産物認証基準に適合した堆肥及び肥料の施用例

区分	製品名	保証成分量 (%)			現物施用量 (kg/10a)	成分施用量 (kg/10a)		
		窒素	リン酸	加里		窒素	リン酸	加里
堆肥	フトール3号				1,200			
基肥	こだわり有機 技	6(0)	5	2	300	18(0)	15	6
	すいか1号T	3(2)	10	10	100	3(2)	10	10
	苦土石灰				80			
	基肥計					21(2)	25	16
追肥	NKC6	17(17)		17	29	5(5)	0	5
	総施用量					26(7)	25	21

注1) () 内は、総窒素のうち、化成肥料由来の窒素成分。

2) 堆肥の原材料は、セルロース、菌体、フライアッシュ（石灰灰）であり、現物当たり全窒素量は0.66%、水分は38.7%である。

☆この「品目別栽培カード」に記載した農薬使用は、平成16年度現地実証試験時点のもので、実際の農薬使用に際しては、ラベルの表示をよく確認するとともに、最新の農薬使用基準を守って使用してください。

●著 作 千葉県農林水産部 農業改良課
千葉県農業総合研究センター
●編集・発行 千葉県農林水産部 生産振興課
●発行年月 平成17年12月

■内容についての問い合わせ先
千葉県農業総合研究センター TEL.0479(57)4150
または各地域の農業事務所 ※令和元年6月変更